マラソン

2005（平成17）年７月17日鑑賞〈道頓堀角座〉 ★★★★

監督＝チョン・ユンチョル／出演＝チョ・スンウ／キム・ミスク／イ・ギヨン／ペク・ソンヒョン／アン・ネサン（シネカノン、松竹配給／2005年韓国映画／117分）

……「自閉症」とは、病気ではなく脳に先天的な生物学的障害がある場合のみ起こる障害というのが近年の定説とのこと。したがって、私たちが一般に理解している内容は大きな誤解であり、無理解ということだ。そんな自閉症の子供と真正面から向かい合うのは大変なことだが、そんなわが子に「走ること」の楽しさを教えた母親の「子育て日記」（？）とも言うべき映画がこれ。韓国で大ヒットし、盧武鉉（ノムヒョン）大統領も感動したという実在の青年の物語だが、さて、あなたはこの映画から何を学び、感じるだろうか……？

私も誤解していた自閉症とは？

「自閉症」という言葉は一般によく使われているが、その場合、それは引きこもりがちで陰鬱な性格の人物のことを指しているはず。そしてその深刻なものが、病気とイメージされる「自閉症」だろう。しかしこの映画のパンフレットにある上杉春雄氏（神経内科医師／ピアニスト）の「いかに自閉症児とコミュニケーションを築くのか」の解説を読んで、それは全くの誤解、というより無理解であったことを思い知らされた。

すなわち、医学用語としての「自閉症」は、病気ではなく障害だということ。しかも脳に先天的な生物学的障害がある場合のみ起こるというのが、近年の定説とのことだ。

しかしてその病状は、「相手の気持ちを理解できない・共感できないなどの対人関係の障害や、言葉の発達の遅れといった“他者との関わりの障害”に加えて、単調で反復的な行動（一つのことに興味が固執する、ワンパターンの生活様式に

こだわる、手や指をいつも複雑にばたつかせたり捻じ曲げたりしている、など)、という特徴を示す」とのこと。この症状はこの映画を観ていると実によくわかる。

上杉氏は、「自閉症」という障害に対する無理解と誤解のため「このような混乱は、ことに自閉症児を持つ親に深刻な負担を強いてきました」と述べた上、「そういうわけで、本映画は主人公よりむしろ、彼の母親からの視点で見る必要があると思います」と提案している。

もちろんこの映画をずっと観ていると、「自閉症」とはどういう障害なのかが少しずつわかってくるものの、そんなにどうしようもない先天的な障害だということまではわからないから、つい気楽に笑ってしまうが、そりゃ親の、とりわけ母親の苦労は並大抵のものではないということが、この解説を読めば、よくわかる……。

家庭崩壊は当然……?

ユン・チョウォン(チョ・スンウ)は、父親(アン・ネサン)と母親(キム・ミスク)との間の長男として生まれた。19歳となった今でも、その知能は5歳程度。そして「自閉症」の障害がわかったのは、幼少時。

そんなチョウォンは弟のユン・ジュンウォン(ペク・ソンヒョン)に対してまで敬語を使う始末。外での、他人とのコミュニケーションはもとより、家族内における会話もかなりヘン……?

しかし母親のキョンスクは19年間このチョウォンとつき合っているから、彼の気持は全てわかっているし、自分の気持もチョウォンには伝わっていると考えていた。そんな母親はチョウォンがまともに社会の中で生きていけるように育てることに精一杯。そのため、夫や次男とまともに向かい合う余裕が全くないのだが、本人はそのことに気づいていない様子。これではチョウォンの家庭が崩壊する(?)のも当然……?

見つけた生き甲斐は走ること!

こんなチョウォンに普通の人と同じようにできることは何だろうと懸命に考えた母親は、チョウォンに対して水泳の他、走ることの楽しさを覚えさせた。

幼少の頃、雨を理解することのできないチョウォンに対してイライラしていた母親の姿が印象的だったが、ことほどさように、5歳児の知能しかない人間に、あらゆる社会事象をどのように理解させるのか、そしてその人物とどのように向かい合ったらいいのかは、とてつもなく難しい作業。

今でこそチョウォンは走ることの楽しさを覚え、毎日の厳しいトレーニングも嫌がらずに積極的に取り組んでいるが、つきつめて考えればこれも、本当に本人の意思によるものか、それとも母親の押しつけによるものかは、かなり微妙……？「チョウォンの脚は？」「100万ドルの脚」「カラダは？」「サイコーです！」というやりとりが何度も登場するが、疑ってみれば、ホントはこれも……？

しかし母親にしてみれば、幼少の時1度は動物園の中でチョウォンを手放してしまおうとまで決心（？）した中で、試行錯誤を重ねて走ることの厳しさと楽しさをチョウォンに覚えさせたのだから、何とかその道を伸ばしてやりたいと願ったのは当然……。

フルマラソンの完走は大変なコト！

走ることの楽しさを覚えたチョウォンは、10kmマラソンに出場してこれを37分という好タイムで走って3位に入賞した。これによって注目を浴びたチョウォンは、母親の勧め（？）によって42.195kmのフルマラソンに挑戦することに……。

しかし10km程度ならまだしも、フルマラソンを、3時間を切って完走するためには、ペース配分をはじめ、呼吸の方法、ランニングの方法、ストレッチの方法、給水の方法など、さまざまな専門的な訓練とその習得が必要なはず。しかし、そんなチョー科学的な訓練が、5歳の知能しか持たず、他人とのコミュニケーションをはかることができないチョウォンに、できるはずがない……。誰しもそう思う。

そして母親もそう考えたからこそ、フルマラソンを走るため、ソン・チョンウク（イ・ギヨン）に対してコーチを依頼したのだが……。

コーチはかつてのメダリストだが……？

母親がコーチを依頼したのは、かつてボストンマラソンで優勝した経歴を持つチョンウク。しかしそれは10年前のことで……。母親がチョンウクに会えたのも、彼が飲酒運転の罰としての社会奉仕で、チョウォンが通う育英学校にやってきたため。こんなチョンウクの精神と生活は荒れ放題……？

当然チョンウクは「自閉症」の生徒達を真面目に教える気はなく、100時間のノルマをただ果たせばよいと考えていた。そんなチョンウクにとって母親の頼みは迷惑至極。そのうえ母親の依頼は一方的で強引（？）だったから、チョンウクはやむをえず引き受けたものの、全然真面目にやる気なし。したがってグラウンドにはつき合うものの、チョウォンにはただ何周走れと指示して自分はベンチで寝そべっているばかりの毎日だった。

そりゃチョンウクにしてみれば、全然意思の通じないチョウォンに対して、愛情を注ぐことができないのは仕方ない。まして母親のチョウォンに対する、そしてチョウォンにマラソンをさせることへの思い入れなど、理解できないのが当然。したがってチョウォンのマラソンコーチの在り方をめぐって、母親とチョンウクとの間に対立が生まれたのも当然……。

面白い母親とコーチとの論争……？

こんなチョンウクコーチと母親との間のチョウォンのマラソン指導をめぐる論争は興味深い。コーチから「あなたの願いは何か？」と聞かれた母親は、「息子が私より１日でも早く死ぬこと。そのためには100歳まで生きないと……」と答えたが、この言葉の持つ重みを一般人が理解するのが容易でないことは当然。

もちろん最初はチョンウクは義務感のみで、イヤイヤつき合っていただけだったが、「100周走れ」と言われたチョウォンが本当にぶっ倒れるまで走り続けている姿を見ると、さすがにチョウォンを見る目が変わってきた……。しかも、毎日コーチしている中でチョウォンに接していると、たしかに会話の仕方やコミュニケーションのパターンは通常人とは違うものの、結構面白い……？

最初のフルマラソンへのチャレンジでは、ペース配分も十分できなかったため、途中でぶっ倒れてしまったチョウォンの姿を見て、母親は後ろ向きになったが、逆にチョンウクは前向きに……。この２人の論争は私たちと同じ目線で語られる

ものだし、お互いがムキになって真剣に議論するからこれは面白い……？　韓国人は何事にもこのように熱する人種だと改めて実感……？

映画のつくり方にはもう一工夫を……！

この映画は実話にもとづくもの。そして既に2002年に韓国の人間ドキュメンタリー番組『走れ！　我が息子』で有名となり、母親が綴った手記も出版されていたもの。

したがって、このチョウォンを主人公とした物語は少なくとも韓国の多くの人たちは既に知っているものだったが、2005年にこの映画が公開されるや大人気を呼び、この映画に感動した盧武鉉（ノムヒョン）大統領との面会まで果たしたとのこと。そして日本でも、多くの著名人たちが、この映画への感動の文章を寄せている。

たしかに私もこの物語の持つ感動性については否定しない。そしてチョウォンを中心とし、母親とチョンウクコーチとの議論や父親と弟の苦悩などを全て含めて、笑いと感動があふれていることは事実。

しかしそれを１本の長編映画として完成させるについては、もう少し工夫があっても良かったのでは、と思う面も……。要するに、それほどこの映画のつくり方はストレート一本槍だということだ。チョウォンとその母親の演技のすばらしさはもちろんだが、ストーリー展開と結果が途中からミエミエとなるため、残念ながら最後に私の目から涙がこぼれることはなかった……。

もちろん、それがこの映画の感動性をはかるメルクマールでないことは当然だが、もう少し何かが……？

2005(平成17)年７月19日記